

地上の星(71)

ゴスペルホール「聖書を読む会」

特別企画(78)

2つのJ (Jesus & Japan) を愛した日本人

内村鑑三物語 (1)

(1861年3月23日 - 1930年3月28日)



日本人に最も広く深い影響を与えたクリスチャンの一人に内村鑑三がいる。

幕末に高崎藩士の長男として生まれたが、ほどなく日本は薩長土佐藩出身者で政府の要職が占められ、それ以外の藩出身者に栄達の道は固く閉ざされてしまった。藩主のブレンまで務めた父、宜之は、これからは英語がものを言う世界になるとの見通しを立て、鑑三に内村家の将来を託し、東京へ遊学させた。期待違わず優秀な成績を収めたが、東京帝大に無試験で入れるという立場を捨て、学費のかからない札幌農学校を目指したことによって、内村の生涯の方向は決定づけられた。そこでキリスト教信仰と出会ったばかりでなく、同期生に、後に国際連合事務次長となって世界に名を馳せた新渡戸稲造、また北大教授となる世界的植物学者、宮部金吾ら、後の東大教授にして世界的土木工学者、広井勇など、錚々たるクリスチャンの友ができたからである。

「ボーイズ・ビー・アムビシャス」(少年よ、大志を抱け)で名高いW・S・クラークはすでにアメリカに帰国していたが、その感化は色濃く残っており、一期生に続いて、内村ら二期生の多くもクリスチャンとなった。学業成績は極めて優秀で、将来は前途洋々と思われたが、卒業後、予期せぬ悲劇が待っていた。初婚の挫折である。新妻タケに、看過できない倫理上の問題が起きたのである。やむなく離縁としたが、鑑三にとってこれほど大きな試練がまだかつてない深刻なものであった。

アメリカで自分を見つめ直そうと、贖罪に似た思いで太平洋を渡った鑑三は、ペンシルバニア州のエルウィン白痴院(当時の呼称)で職員となった後、アマースト大学に学び、そこでシーリー学長との劇的な出会いを果たす。自分にばかり目を留めていた鑑三が、十字架に贖いを完成したキリストを見あげる信仰を教えられたのである。まさに第二の誕生というにふさわしいできごとであった。

帰国後、北越学館、熊本英学校などで教鞭をとり、学生たちに大きな影響を与えた鑑三は、再婚後、第一高等中学校(現在の東京大学)の教員となり、これからは安定した将来が待っていると思われたが、ほどなく日本中を騒がせる大事件の渦中に巻き込まれるとは夢にも思わないことであった。

今回は、内村鑑三の前半生から、札幌農学校の学生時代、結婚の挫折、そして不敬事件までを取り上げます。

記

1. 日時 : 2018年10月19日(金) 10:30 AM より
2. 場所 : ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師 : 尾崎富雄(ゴスペルホール代表)